

## 全元起注『黃帝内經素問』の成立について

——「長夏」からの一考察——

藤 山 和 子

「春は女思い、秋は士悲しむ」（『淮南子』繆稱訓）という語もあるように、季節と人の心のありようは密接な関係にある（青木正児「支那人の自然観」、そのことは古来文学の上での重要なテーマの一つとなってきた。季節はまた人心のみならず、人の健康状態にも多大な影響を及ぼすものであり、これは医学の重要なテーマの一つとなっている）。

『黃帝内經靈樞』（以下『靈樞』）とともに、中国最古の体系的な医学書といわれる『黃帝内經素問』（以下『素問』）も、生理・病理・診断・治療の上で、季節と結びつけたさまざまな論述をこころみている。それらの中には秦漢以来盛んに行われた五行説の影響を受けて、季節と人体の関係を五行的に説明している記述も多い。中でも興味をひかれるのは、季節を五行に配当した場合の土に相当する表現で、『素問』七十四篇を通じ、「土」・「七十二日」・「季夏」・「至陰」・「長夏」と五種類の表現がある。これは四時及び十二ヶ月が、五の数に一致しないために生ずる苦心のあらわれであり、土に應ずる季節の位置の不安定さをあらわすものとみることができよう。このことはまた、『素問』が当時のさまざまな五行説の影響を受けていたことをも示している。以下は、『素問』の「土」・「七十二日」・「季夏」・「至陰」・「長夏」について検討を加え、特に最後の「長夏」から問題点を引き出そうとするものであるが、まず順序として「土」から順次

検討を加えたい。

『禮記』月令は一年十二ヶ月を五行に配するために、季夏と孟秋の間に中央土をもうけている。唐の孔穎達は『禮記正義』の中で、この中央土が主どる季節は春夏秋冬四時のうちの各十八日、つまり計七十二日であると述べている。もともとこれを明記するようになったのは、『漢書』律曆志の「推五行、其行各七十三日……中央各十八日」及び『白虎通』五行篇の「土王四季、各十八日」などである。『素問』のいわゆる「土」はこの『禮記』月令系統の影響を受けたものであることは、太陰陽明論篇の次の文からも判る。

脾は土である。土は中央を治める。土はまた常に四時に旺しているために、脾は四蔵の中で最も長いのである。土は四時夫々の十八日ずつに寄旺して治め、単独に時を主どることはできない。

一年を四時十二ヶ月に関係なく七十二日ずつに五等分するやりかたは、『管子』五行篇<sup>(2)</sup>、『淮南子』天文訓<sup>(3)</sup>などにみえる。しかし『素問』の「七十二日」は、「脾蔵に病変が生じると、七十二日、つまり四季各々の十八日に腹が張り、煩満<sup>むねつかえ</sup>、食欲不振となるなどの症状を呈する」（刺要論篇）という使われかたからみて、一年を五等分した七十二日ではなく、土の旺する日の総合計を具体的に述べたものであるということが判る。これも『禮記』月令系統のものといえよう。

『淮南子』時則訓は中央に季夏を配している。これは一年十二ヶ月を三ヶ月あて四時に配したもののうち、夏の三ヶ月から一ヶ月を中央に割りあてたもので、中央季夏の旺する日は三十日である。『素問』の「季夏」は恐らく『淮南子』時則訓の影響を受けているものであろう。

「至陰」は『素問』においては三つの意味がある。脾を指す場合、腎を指す場合、穴名を云う場合の三つである。ここで問題とする「至陰」は、五行で土に配当される脾を指していることは明らかであるが、その前後の文「秋になると肺<sup>(4)</sup>

がまず邪を受け、春には肝がまず邪を受け、夏には心がまず邪を受け、至陰には脾がまず邪を受け、冬には腎がまず邪を受ける」(歎論篇)からみて、脾そのものではなく、脾に応ずる季節を指していることが判る。たゞ「至陰」という表現で五時のうちの一時を指すということは、他の五行説にはみられず、『素問』独自のものである。

最後の「長夏」はこれまでのどの文献にもみられない新しいことばである。その意味するところは「土」と同じように中央を主どり、四時に旺するが、実際には「季夏」と同じように六月に当てるというものらしい。つまり、一年十二ヶ月の中で最も長い<sup>たつと</sup>という名譽を与えられながら、現実には六月に位置づけられたものといえる。この「土」と「季夏」を兼ねそなえたような概念をもちこんだ「長夏」ということばを、なぜ『素問』が新しく作り出さなければならなかったか、ということを追求することが以下の小論の目的である。それを明らかにすることによって、現存する『素問』各篇間の成立の前後関係をいくらかでも知る手がかりとなるだろうと考えるからである。

## 二

現存する『素問』のテキストは、唐の王冰が注を加えた次注本<sup>(5)</sup>と称されるものである。しかし、この次注本というのは、王冰が注をつける際に本文の字句を一部書き変え、新しく運氣論七篇を加え、全体の構成を著しく変えて編集しなおすなど、王冰の手が大幅に加わったものである。このために『漢書』藝文志にいう『黄帝内經』十八卷、『隋書』經籍志にいう『黄帝素問』九卷、同じく全元起注『黄帝素問』八卷がすべて散佚してしまった今となつては、王冰の次注本から古い『素問』のかたちを知ることが難しくなつてしまった。宋代には大々的に医書の校勘がおしすすめられ、次注本『素問』も林億らによって全元起注本『素問』や、『黄帝甲乙經』<sup>(6)</sup>・『黄帝内經太素』<sup>(7)</sup>(以下『太素』が引く『素問』などと校合が行われ、その結果は新校正として次注本につけ加えられた。これが『重廣補注黄帝内經素問』と称さ

れるものである。新校正には次注本と全元起注本との間の字句及び篇の構成の異同は勿論のこと、全元起の部分的な注解も引かれている。また、次注本の各篇が全元起注本では第何巻にあったかということも記されている。この新校正をもとに次注本を組み変えていくならば、全元起注本のおよその枠組みだけは知ることができる訳である。

次注本『素問』八十一篇中、王冰の竄入である七篇は問題外として、残る七十四篇中「長夏」の語が使われるのは次の六篇である。

金匱眞言論篇 六節藏象論篇 平人氣象論篇 藏氣法時論篇 宣明五氣篇 四時刺逆從論篇

これらのうち、金匱眞言論篇及び六節藏象論篇で使われる「長夏」の語、或いは「長夏」の語を含む文が、本来の『素問』でも使われていたかどうかは甚だ疑わしい。何となれば、まず金匱眞言論篇では次のようにいう。

黄帝問曰、天有八風、經有五風、何謂。岐伯對曰、八風發邪、以爲經風、觸五藏、邪氣發病。

所謂得四時之勝者、春勝長夏、長夏勝冬、冬勝夏、夏勝秋、秋勝春、所謂四時之勝也。

東風生於春、病在肝、兪在頸項、南風生於夏、病在心、兪在胸脇、西風生於秋、病在肺、兪在肩背、北風生於冬、病在腎、兪在腰股、中央爲土、病在脾、兪在脊。

「天には八風あり、人の經脈には五風あるというのか」という黄帝の問に対し、岐伯は八方の風は邪氣を生じ、それが筋脈から人体に入って五藏に触れると病を誘発することとをとき、続けて次のようにいう。

いわゆる四時相勝の氣を得るといふのは、春は長夏に勝ち、長夏は冬に勝ち、冬は夏に勝ち、夏は秋に勝ち、秋は春に勝つということ、これが四時相勝の規律でございます。

このあと岐伯は、東風・南風・西風・北風・中央と病が発生する五藏との関係、及びその治療すべき兪穴の部位を述べる。

この一連の問答を読むと、四時相勝の規律を述べる部分は唐突な感じで、前後の八風・五風をとく文とつながらない。丹波元簡はその著『素問識』の中で、「所謂以下三十二文字と前後の文とは、文義の流れがスムーズでなく、つながらない。恐らく他篇の錯簡であろう」といつている。わたくしもこの錯簡説に従うもので金匱眞言論篇のこの部分の「長夏」は本来のものとは考えられない。

この相勝の規律を述べる文とは同様の文が、従ってそこにも「長夏」の語が使われるのだが、六節藏象論篇にもみえる。新校正はこの文を含む六節藏象論篇の前半部分は、全元起注本及び『太素』にもなく、王冰の補うところであろうと指摘している。その内容も運氣について述べるところが多く、他篇の内容と異っている。恐らく、王冰が新しく加えた運氣論七篇の正統化をここで試みようとしたのであろう。よってこの部分の「長夏」も本来のものとは考えられない。この他にも金匱眞言論篇では「長夏」の語が使われる。

故春善病飢衄、仲夏善病胸脇、長夏善病洞泄寒中、秋善病風瘧、冬善病痺厥。（ゆえに春には飢や衄を出しやすく、仲夏には胸脇を病みやすく、長夏には内部に寒氣が集中し、洞泄しやすく、秋には風瘧をおこしやすく、冬には手足が痺たり、厥たりしやすくなります。）

この文は『太素』では次のようになっている。

故春喜病飢衄、夏喜病洞泄寒、仲夏喜病胸脇、秋喜病風瘧、冬喜病痺厥（卷三陰陽雜説）

重要なのは、『太素』には「長夏」の語がないことと、次注本の「長夏」と「仲夏」の病変部分の順序が、『太素』では逆になっていることである。洞泄はらくだしについて、生氣通天論篇は「春に風邪に傷られると、夏には飢泄はらくだしを生ず」とあり、ともに洞泄を夏の病（9）としておこす、陰陽應象大論篇は「春に風邪に傷られると、夏には飢泄はらくだしを生ず」とあり、ともに洞泄を夏の病としておこす、内容からすれば『太素』の「夏喜病洞泄寒、仲夏喜病胸脇」が正しい訳である。思うに『太素』でいう「仲

「夏」とは、孟夏・仲夏・季夏の「仲夏」ではなく、一年の真中の夏、いわゆる中央土に應ずる夏という意味なのである。それをある時期に、『太素』の「仲夏」を季夏の前の「仲夏」と誤解した人が、夏と「仲夏」の順を逆にし、夏を「長夏」と改め、次注本のようなかたちにしたのであろう。そのため、次注本は内容的にも他篇と一致しないことになったし、また一年のうちで孟夏を欠くという不均衡を生じることとなった。たゞ新校正はこのことについては何もふれておらず、全元起注本がどのようになっていたかは判らない。

以上みてきたように、金匱真言論篇、六節藏象論篇で使われている「長夏」は、すべて本来の『素問』にはなかったものと考えてよいだろう。この見かたに立つならば、「長夏」の語が使われる篇は上掲六篇から二篇を除いた次の四篇となる。

平人氣象論篇 藏氣法時論篇 宣明五氣篇 四時刺逆從論篇

### 三

以上の四篇は次注本では第五卷（平人氣象論篇）、第七卷（藏氣法時論篇、宣明五氣篇）、第十八卷（四時刺逆從論篇）に散在しているが、これを全元起注本に組み変えてみると、すべて第一卷に集中しており、全元起注本の第一卷では、「長夏」が特別な意味を持っているのではないかと考えられる。

新校正によれば、全元起注本の第一卷とは次の諸篇である。

平人氣象論篇 三部九候論篇（全元起注本の篇名は決死生篇） 藏氣法時論篇<sup>(10)</sup> 宣明五氣篇（全元起注本は血氣形志篇を含む） 離合眞邪論篇<sup>(11)</sup>（全元起注本の篇名は經名篇） 調經論篇<sup>(12)</sup> 四時刺逆從論篇

幸いなことに、新校正は藏氣法時論篇の中の「脾は長夏を主とる」という句に対する全元起的注を引いており、「長

「夏」に対する全元起の考えかたを知ることができる。新校正は次のようにいう。

全元起云、脾主四季、六月是火王之處、蓋以脾主中央、六月是十二月之中、一年之半、故脾主六月也。〔全元起は、「脾は四季を主どる。六月は火が旺する季節である。思うに脾は中央を主どり、六月というのは十二ヶ月の真中、一年の半ばに相当する。だから脾は六月を主どるのである」といつている。〕

この脾は四季を主どるといふのは、『禮記』月令の中央土が春夏秋冬の各十八日を主どるといふのと、同じ考えかたである。また、脾が中央に位しているから便宜的にそれを六月にあてるといふのは、『淮南子』時則訓が中央に季夏をあてゝいるのと、結果的には一致する。つまりここで『禮記』月令系の土の考えかたと、『淮南子』時則訓などという季夏の内容が一つになったことが判るのである。

またそれを「長夏」と称するゆえんは、同じく「脾は長夏を主どる」に対する王冰の次の注からうかがい知ることができる。

長夏謂六月也。夏爲土母、土長于中、以長而治、故云長夏。〔長夏とは六月のことをいふのである。夏（火）は（五行相生説の木火土金水でいえば）土の母である。その土は中央にあって長たるものである。四季の長でありかつ治めているから、長夏というのである。〕

つまり、王冰のいいかたを借りれば、四季を主どり、一年の長であるから「長夏」と称するが、便宜的に六月にあてるといふのが、『素問』のいわゆる「長夏」なのである。

医書では中央土に配当される五藏六腑は、脾及び胃である。脾と胃については、全元起注本第一卷以外にも多くの場所で見及している。例えば、胃については五藏別論篇（全元起注本第五卷）で岐伯は黄帝に次のように答える。

胃というものは飲食物の集まるところ、つまり「水穀の海」であり、六腑の大源であります。地の五味、つまり飲

食物は口からその胃にたまり、胃と表裏をなして大陰に属する脾の作用によって精氣と化し、五臓を滋養することになるのですが……。〔藪内清編『中國の科學』〕

脾と胃は表裏の關係にあり、太陰陽明論篇（全元起注本第六卷）は、「脾の病にかゝると、四肢の正常な働きが失われるのはなぜか」という黄帝の問に、岐伯は次のように答える。

四肢はみな水穀の精氣を胃から受けています。たゞ胃の津液は直接四肢に達するのではなく、必ず脾の働きによって胃へ運ばれます。もし脾に病變が生じると、胃のためにその津液を運ぶことができなくなり、四肢は水穀の精氣を受けることができません。

五臓や四肢は、中央土に配当される胃の水穀の精氣を受けて養われる。即ち胃から滋養が五臓や四肢に行きわたるというのは、『禮記』月令系の五行説―中央土は春夏秋冬各季の十八日ずつを主どるという考えかたに通じ、五行説で生理・病理・診断治療などをとく場合には非常に都合がよかったことと思われる。事実、太陰陽明論篇ではこの文にすぐ続けて、同じく岐伯のことばとして「脾は土であります。土は中央を治めています。土はまた常に四時に旺しているの脾は四臓の中で最も長いのです。土は四時夫々の十八日ずつに寄旺して治め、単独に時を主どることはできません」と述べている。

この胃氣を受けた脈象をあらゆる脈象の中で最も重要なものである、つまり長いもの<sup>たつと</sup>であると全篇にわたって強調するのが、全元起注本第一卷の平人氣象論篇である。この篇は

平人之常氣稟於胃、胃者平人之常氣也、人無胃氣曰逆、逆者死。（中略）

人以水穀爲本、故人絶水穀則死、脈無胃無氣亦死。所謂無胃氣者、但得眞藏脈、不得胃氣也。〔平人の脈における正常の氣は、胃に來源します。だから、胃氣が平人の脈に正常の氣となってあらわれるのです。脈に胃氣があら



われない場合を「逆」であるといい、死の危険を意味します。(中略)人間の生命活動の本源は、飲食物であります。だから、飲食物を絶てば人は死にます。脈象に胃氣があらわれなければ、それもやはり死であります。胃氣なし、というのは、もっぱら臟脈があらわれて和緩の胃氣脈が現出しないということです。(戴内清編『中國の科學』)という認識に立って、春・夏・長夏・秋・冬の四時脈、及び心・肺・肝・脾・腎の五藏脈の夫々について、胃氣の有無多少によって生ずる平脈・病脈・死脈の脈象を詳述する。五藏別論篇にも「五藏六腑の精氣そのものと、それぞれの臟器を養う榮養素はどちらも胃に來源し、それらの状況に異常があれば、それは氣口部位にあらわれるのです」(戴内清編『中國の科學』)とあるように、寸口(氣口に同じ)脈が全身の藏腑氣血の活動状況をあらわしているという理解に基づいて、具体的には寸口部位で脈を診、その脈象に胃氣があらわれているかどうかを診るのである。胃氣があらわれているとは、脈象が徐く和らかで一定していることを指す。<sup>(14)</sup>

胃は「水穀の海」であり、脾の働きにより滋養を五藏と四肢にゆきわたらせるというのを、五行的に表現したのが「中央土」とすれば、胃氣の有無多少が人間の生死を決定するという認識から、その胃氣を「最高の位置」にまで高めたのが、平人氣象論篇である。それを五行的に表現するには、「中央土」というだけではその概念をよりこみきれず、どうしても「長い土」という表現が必要であつたものと思われる。「土」を「夏」としたのは、相生説や相勝説で五行の論理を循環させていく場合、土を春夏秋冬各季にあてるよりは、六月に限定したほうが循環させやすいという、便宜上からのものであろう。勿論これは既述したように『淮南子』時則訓などが季夏を中央土に配していることの影響があるだろう。

胃氣を最重要視した学派を仮に「長夏学派」と呼ぶならば、それまでの医学理論に新しい視点を加えた平人氣象論篇こそは、「長夏学派」の出現を可能たらしめたその代表作であった、と考えるのである。

#### 四

平人氣象論篇を「長夏学派」の代表作とするならば、藏氣法時論篇、宣明五氣篇は、平人氣象論篇が基盤とする五行説について述べる篇である。

藏氣法時論篇は五蔵の氣の盛衰によって起る疾病の種類、及び四時五行の変化の規律に基づいて変化する疾病の輕重と死生の時期、その治療法などをとく。いわば、この卷における総論のようなものである。この篇は春・夏・長夏・秋・冬の順で論を進めているにもかゝらず、その冒頭で「五行者、金木水火土也」といっているのが特徴的である。この排列の順次は木火土金水の相生説、土木金火水の相勝説、或いは水火木金土の順次で並ぶ『尚書』洪範五行のいずれとも異っている。また『素問』・『靈樞』の他篇にもこの順序で排列する例はない。たゞ班固の『白虎通』五行篇<sup>(15)</sup>、『淮南子』原道訓の高誘注<sup>(16)</sup>、『左傳』襄公二十七年、及び昭公元年の杜預注<sup>(17)</sup>の中には、金木水火土の排列がみられる。これら班固の『白虎通』を始めとする諸資料は、今古文学派の対立の烈しかった時代のものであり、五行の中央土に新しい概念を盛りこんだ「長夏学派」も、当然今古文学派いずれかに加担するものであったろうが、このことについては、後日稿を改めて論ずることとしたい。たゞしわたくしとしては、「長夏学派」と今文学派との関係について重視したいと思う。

宣明五氣篇は、五蔵の氣と人間の健康との関係を項目別に五行説に基づいて述べる篇で、いわば五行説の一覽表のようなものである。この篇の篇末には、次注本で血氣形志篇と名づけられている文が続いていたと、新校正は指摘している。<sup>(18)</sup>

四時刺逆從論篇は、人体の經氣は四時の氣候の変化にともない、その主どる部位を異にするので、針で治療する場合

には必ず四時陰陽氣血の変化に基づいて行われなければならないことをとく。そして四時に反して刺した場合に起る病変を夫々述べているが、これは診要經終論篇（全元起注本第四卷）の文とよく似ている。例えば、診要經終論篇では、「夏に秋に應ずる部位を刺すと、病は愈えず、人はひそかに無言でいたいと思うようになり、ビクビクして、まるで今にも捕えられるかのようなのである」としているのに対して、四時刺逆從論篇のほうは、「夏に肌肉を刺すと、血氣は内に却しりぞき弱まり、人は恐れやすくなる」と、いたって簡潔ではあるが内容は同じである。違っているのは診要經終論篇は「夏刺秋分（皮膚）」といっているのに、四時刺逆從論篇のほうは「夏刺肌肉（長夏）」としている部分である。四時刺逆從論篇は四時の主とする部位を、「春氣在經絡、夏氣在孫絡（絡脈）、長夏氣在肌肉、秋氣在皮膚、冬氣在骨髓中」と規定している。今比較の便のために、身体の部位の下にその主とする季節を補って両者を比べると、次のようになる（病變部分を除く）。

四時刺逆從論篇	診要經終論篇	四時刺逆從論篇	診要經終論篇
春刺絡脈（夏） 春刺肌肉（長夏） 春刺筋骨（冬） 夏刺經脈（春） 夏刺肌肉（長夏） 夏刺筋骨（冬）	春刺夏分 春刺秋分 春刺冬分 夏刺春分 夏刺秋分 夏刺冬分	秋刺經脈（春） 秋刺絡脈（夏） 秋刺筋骨（冬） 冬刺經脈（春） 冬刺絡脈（夏） 冬刺肌肉（長夏）	秋刺春分 秋刺夏分 秋刺冬分 冬刺春分 冬刺夏分 冬刺秋分

この表から、診要經終論篇のほうは四時になっているのに対し、四時刺逆從論篇のほうは不完全ながら五時になっていること、しかしそのすべてから秋の分に相当する皮膚の語がぬけていることが判る。たゞ先に引いた例からも判るように、四時刺逆從論篇の肌肉（長夏）の病變部分の内容は、診要經終論篇の秋の分の内容とほとんど同じなのである。つま

り、四時刺逆從論篇は、もともとあったと思われる診要經終論篇の文を簡潔にいい換え、その際、皮膚（秋）とすべきところを肌肉（長夏）としたのである。恐らく「長夏学派」としては、どうしても季節から長夏を除くことができなかったであろう。<sup>(19)</sup>

四時刺逆從論篇の成立の事情が以上のようにであったとすると、「長夏学派」の出現はそれ程早い時期ではなかった、少くも診要經終論篇の成立よりも後であると考えられる。

以上が全元起注本第一巻中、「長夏」の語が使われる諸篇である。次に直接には五行説にふれない三篇、三部九候論篇、離合眞邪論篇、調經論篇についてみてみよう。

これら三篇中、最も重要なのは三部九候論篇で、全元起注本では決死生という篇名であったという。これは古代の全身診脈法について述べる篇で、人体を上中下の三部に、各部を更に天地人の三候に、計九候に分け、それら三部九候の脈象が互いに相応しているか否かによって、全身の藏腑氣血の活動状況を診るのである。この全身診脈法が当時非常に重視されていたであろうことは、全元起注本の篇名が決死生であったということや、八正神明論篇（全元起注本第二巻）などで、病気の早期診断と治療には三部九候診法が必要であるということを強調していることから推測される。全元起注本第一巻中の離合眞邪論篇、調經論篇もまた、この三部九候論篇に基づいて述べる篇である。

調經論篇は、人の健康は血氣の調和と陰陽の平衡を得てはじめて保持できるもので、この状態は三部九候の脈象とも相応する。このような人を正常人、つまり「平人」と呼ぶ、といっている。そしてこの篇の最後には「謹んで三部九候の脈象を察し治療を施すならば、はじめて針刺の道は完全に備わるのである」と述べるのである。

離合眞邪論篇は、邪氣が集まり発病した際には、三部九候診法に基づき早期治療を心がけ、針刺の治療を行うべきことをとく。三部九候の診法を理解せぬ医者は、末長い信頼を得ることはできないし、四時五行相勝の論理を知らず、こ

れに反して氣血を補えば、邪氣をはびこらせ、正氣を攻め、病人の生命を絶つてしまふ、といっている。この篇は直接五行説にふれることはしないが、その冒頭に、自然界の變化が川の流れをいろいろに變化させるように、人体にも多大な影響を与えると述べていること、また先にふれたように、四時五行相勝の論理を知らず云々の文があることから、自然と人体の關係を重視していること、更にそれを五行的にとらえていることが判る。しかもその五行説は「長夏学派」を意識しているだろうことが、つぎの文から推察できる。

地以候地、天以候天、人以候人、調之中府、以定三部。

この中府については、呉崐の「中府は胃である。土は中宮を主どる。故に中府という<sup>(20)</sup>」という説、張介賓の「中府は藏氣である。凡そ三部九候の脈証はみな藏氣を以て主となす<sup>(21)</sup>」という説などがある、『白虎通』性情篇には「六府とは何か。大腸・小腸・胃・膀胱・三焦・胆をいうのである。府は五藏の宮府をいうのである」とある。中府とは、やはり呉崐のいうように胃、つまり六府のうち中央に配されるものの意であろう。中府をこのように解するならば、さきの文はつぎのように解釈できる。

天・地・人の夫々で得た三部九候の脈象を、胃氣の有無多少によって調べ、三部九候の診断を決定する。

これは、胃氣を最重要視した平人氣象論の主張と、三部九候診とを結びつけようとした文と考えることができる。

これと同じようなことは四時刺逆從論篇についてもいえる。四時刺逆從論篇は直接「長夏学派」の手になると思われる篇であるが、そこにも「診断の時には、必ず三部九候脈の變化を詳細に診、正氣を乱さず、精氣を逆転させないようしなければならぬ」という一文がある。これもやはり「長夏学派」と三部九候診を結びつけようとしたものである。

## 五

以上述べてきたように、全元起注本第一巻中、最も重要なのは、診脈法をいう平人氣象論篇と三部九候論篇である。恐らく三部九候の全身診脈法は古くから行われ、一般化しており、そこへ新しい視点を持った胃気を重視する平人氣象論が提起されたものであろう。しかし、それは三部九候論に対立するものとしてではなく、あらゆる診脈の判断の根拠は、胃気の有無多少によるべきであるという、むしろ三部九候論を強化するかたちでの提起であった。この両者を実際に結びつけるのが、刺法をとく四時刺逆從論篇と離合眞邪論篇である。藏氣法時論篇は平人氣象論篇の基礎固めのための、五行説に基づく総論であり、宣明五氣篇はそれまでの五行説を整理して一覽表にまとめたものである。また調經論篇は三部九候論篇の重要なことを強調する篇である。

つまり、全元起注本第一巻とは、胃気的重要性を主張した「長夏学派」が、自派の説を主張するとともに、古くからある説をもとりあげ、更にそれを結びつける篇をも書き加え、一つの巻にまとめあげたものと考えてるのである。そして、「長夏学派」の手になるこの巻が、第一巻に据えられているということは、全元起注本全体の編集が、「長夏学派」によってなされたことを示唆しているともいえるのではないかと考える。

なお、本稿では『重廣補注黄帝内經素問』王冰次注・林億等補注・孫兆重改誤、四部叢刊本をテキストとして使用し、古今医統正脈全書本、人民衛生出版社本、和刻本により文字を校合した。

## 注

(1) 現存する『素問』のテキストは、九卷八十一篇であるが、そのうち七篇は唐の王冰の竄入といわれている。十九ページ参照。

(2) 日至、曙甲子、木行御……七十二日而畢。曙丙子、火行御……七十二日畢。曙戊子、土行御……七十二日畢。曙庚子、金行御……七十二日畢。曙壬子、水行御……七十二日畢。

(3) 壬午冬至、甲子受制、木用事、火煙青、七十二日。丙子受制、火用事、火煙赤、七十二日。戊子受制、土用事、火煙黃、七十二日。庚子受制、金用事、火煙白、七十二日。壬子受制、水用事、火煙黑、七十二日而歲終。

(4) 『太素』及び新校正の引く全元起注本には、秋乘則の三字はない。

(5) 『素問』にはじめて注をつけたのは齊梁間の人全元起で、王冰の注は全元起に次ぐ二番目の注である。

(6) 晋の皇甫謐が『素問』・『靈樞』・『明堂孔穴鍼灸治要』の三書の必要なところを集め、自分の臨床經驗をも加えて著した鍼灸の書。十二卷。

(7) 隋の楊上善編。三十卷。『素問』・『靈樞』を分類編纂し、自ら注も加えた。現在するもの二十三卷。全元起注本と一致するところが多く、王冰の次注本より、より古いかたちを残していると思われる。

(8) 以下、本稿でいう次注本とは、『重廣補注黄帝内經素問』に基づく次注本を指す。

(9) 生氣通天論篇も陰陽應象大論篇も、ともにこの部分は四時に応ずる病變のみで、長夏に應ずる病變の記述はない。

(10) 新校正によれば、篇末の肝色青以下の文は、全元起注本では第六卷脈要精微論篇末にあった。

(11) 新校正によれば、全元起注本では眞邪論という篇名で第二卷に重出する。

(12) 新校正によれば、篇首の厥陰有餘から筋急目痛までの文は、全元起注本では第六卷にあった。

(13) 掌の下一寸のところにある診脈部位。

(14) 『靈樞』終始篇に「邪来たるや繁にして疾、穀氣来たるや徐にして和」とある。

(15) 五行者何謂也。謂金木火土也。

(16) 節四時而調五行〔注〕五行金木水火土也。

(17) 襄公二十七年—天生五材〔注〕金木水火土也。昭公元年—降生五味〔注〕謂金味辛、木味酸、水味鹹、火味苦、土味甘。

全元起注『黄帝内經素問』の成立について

(18) 新校正によれば、全元起注本では宣明五氣篇と血氣形志篇は一つの篇であったのを、王冰が分けて二つの篇にしたとある。

血氣形志篇は経脈の血氣の多少と、形(肉体)志(精神)の状態によって生ずる五種の病とその治療法をとくものである。宣明五氣篇とはかたちも内容も異っており、王冰が二つに分けた理由も納得できる氣がする。たゞ、四時陰陽氣血の多少によって診断と治療を行うべしとする「長夏学派」にとっては、五臓の氣も、血氣の多少も同じ重さを持つもので、一つの篇にまとめていたことは、むしろ当然のことなのかもしれない。六つの経脈の血氣の多少を五つに分けることができず、かたちの上での不均衡を生じているだけのことなのであろう。

(19) このあと、五臓を誤刺した結果死に至るまでの日数とその病変を述べる文が続くが、同じような文は刺禁論篇と診要經終論篇にもある。刺禁論篇とはその内容は一致するが、診要經終論篇のほうは病変に関する記述がなく、また死に至るまでの日数も夫々違っている。この違いは、他派の学説であるためなのか、伝写の誤りによるものなのか、はっきりしない。

(20) 明の呉崐注『黃帝内經素問』二十四卷。

(21) 明の張介賓注『類經』三十二卷。張介賓は『素問』・『靈樞』の全文を十二大類に分類し『類經』をつくり、注解を加えた。